

《研究ノート》

「金融資本」の再検討

熊谷 一男

これまで、一八七〇年代以後の資本主義の分析に際して、「金融資本」という概念は屢々使用されてきたが、そのわりにこの概念の嚴密な考察は、比較的等閑視されてきたように思われる。本稿では、必ずしも十分考察できないかもしれないが、従來の研究の成果を省みて、本來理論的にきわめて重要であるにもかゝらず、看過されてきた點を明らかにし、今後の研究のための一つの礎石としたい。

「産業が銀行に從屬するという」仕方、で、現實に産業資本に轉化されている銀行資本、すなわち貨幣形態における資本を、金融資本と名づける」というヒルファードイングの周知の見解は、ドイツの特殊な金融資本の型を一般化したものであると、批判されてきた。「ベレアイル兄弟のクレディ・モビレがその

原型をなし、預金取引と株式取引とが結合したドイツ大銀行によりその形態を完成した、特殊な大陸的現象ではないだろう⁽²⁾」とベルンシュタインは、イギリスを例にとつて、ヒルファードイングの「金融資本」に反論している。他方スウィージーは、アメリカを例にとつて、ヒルファードイングの定義は、「競争的資本主義から獨占資本主義への過渡期に一致する資本主義發展の『一時的局面』」にのみ、妥當するにすぎないとしているし、當のドイツに關しても、大野氏は、東ドイツでは鐵鑛産業である石炭⁽¹⁾鐵鋼業において、「獨占段階でも、西ドイツとは對照的に、『銀行が全くなんの役割も演じない壯大な集中』が展開されている」とのべているから、ヒルファードイングの定義がそのまま歴史的事實に妥當する場合は、きわめて限られているといえる。

このように、歴史的事實として、ヒルファードイングの定義は必ずしも一般性をもたないことが、わけてもスウィージーにより指摘されて以來、わが國では、この概念をめぐってさまざまな論議が行われてきた。これらの論議と、なんらかの形でこの概念に關説した諸著述とを通じて、一貫してうかがわれることは、ヒルファードイングの誤謬を、結合の主導權を銀行資本が握るとした點に、求めていることである。したがって、主體⁽¹⁾主導權を握るものを獨占的産業資本であるとしたり、兩者を並置して、現實にはどちらかが主體をなす、としたりする見解があらわれた。古賀英正氏の「日本金融資本論」における見解は、その極をなすものである。氏は、「金融資本」を「獨占的銀

行資本と獨占的産業資本とが、各種の形において、融合することによって生ずる最新の、最高の、支配資本の形態」と解して、「融合・結合における主導権の所在」により、(1)銀行が産業を從屬させる、(2)産業が銀行を從屬させる、(3)両者が對等の立場で結合する、という三つの場合と、次の二つの結合方法、すなわち、(1)両者が直接結合する場合と、(2)両者が他の共通の支配者により間接に結合される場合と、を組み合わせて、六つの型の融合・結合をつくりあげている。

つまり、ヒルファデーディングの定義が歴史的事實に必ずしも妥當しないところから、歴史的事實の凡ゆる場合に妥當するよう(7)に定義を擴大する操作が行われてきた。しかし、古賀氏の定義をみると、如上の研究方向が一つの袋小路に辿りついていることに、容易に気づくであろう。「金融資本」の形態をいろいろあげていくけれども、一體「金融資本」を資本として成り立たせるものは何か、という問題が不問に付されている。

以下この問題の考察を、さしあたりヒルファデーディングの「金融資本」の概念の検討からはじめよう。

(1) Rudolf Hilferding, Das Finanzkapital Eine Studie über die jüngste Entwicklung des Kapitalismus Dietz Verlag, Berlin, 1955, S. 335 林要譯「金融資本論」大月書店刊三七三頁

(2) Justus Hasagen, Marxismus und Imperialismus, Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, 1919, Jahrg. 113, 63「新マルクス主義者の帝國主義論」所收、

尙ハスハーゲンによれば、ヒルファデーディングの本著に對して、ベルンシュタインの他に、シッペル、カベルスツ、ブロードニッツ等による批判が行われている。

(3) Paul M. Sweezy, The theory of capitalist development, 1942, p. 268 中村金治譯「資本主義發展の理論」

三六五頁

(4) 大野英二「ドイツ金融資本成立史論」八五頁

(5) 古賀英正「日本金融資本論」八頁

(6) 前掲書九頁

(7) かかる「擴大」操作を行わしめた一つの理由は、レーニンもまた、若干の修正を施した上であるとはいへ、ヒルファデーディングの定義をほぼそのまま採用していることにある。「生産の集積、そこから成長してくる獨占體、銀行と産業との融合あるいは癒着、——これが金融資本の發生史であり、金融資本の概念の内容である。」レーニン全集マルクス・レーニン研究所譯二二卷 二六〇頁

二

「本書でのごころみは、最近の資本主義的發展の經濟的諸現象を科學的につかもうとするにある。という意味は、これらの現象をば、かのペティ(W. Petty)にはじまりマルクスにおいてその最高の表現をみいだした古典派經濟學の理論體系のうち(8)に、あみ入れようとするにある」とヒルファデーディングは、「金融資本論」の序文で、のべている。この目的が「金融資本」

についてどんな形で果されているか、を考察しよう。

かれは序文で『近代』資本主義の特性をなす集中過程は、一方ではカルテルやトラストの形成による『自由競争の止揚』となつてあらわれ、他方では銀行資本と産業資本とのますます緊密な關聯となつてあらわれる⁽²⁾とのべ、「資本は、この關聯を通して、……金融資本の形態をとる⁽³⁾、とのべている。ここから「銀行資本と産業資本とのますます緊密な關聯」を明らかにすることによつて「金融資本」の分析にいたることが、本著(一・二・三篇)の主要な對象の一つをなすことをうかがい知ることができる。

第一篇では、第一章で信用の基礎をなす貨幣の分析、第二章で紙幣による金屬貨幣の節約、第三章で信用貨幣による金屬貨幣の代位、第四章で資本の流通機構から遊休貨幣資本が形成される必然性、第五章で信用それ自體、資本信用と流通信用の分析、が與えられている。つまり第二章から第五章までは、流通空費の發生および資本の遊休・の必然性から、節約および遊休を止揚する手段として、紙幣・信用貨幣・兩種信用が成立することと、それらの機能と、を説明している。さらに第五章では、兩種信用の説明の後に、「この種の信用(資本信用 引用者)授與にとりなつて、同時に産業にたいする銀行の地位もまた變化する⁽⁶⁾」とのべ、「銀行が産業資本家に生産資本を融通するところまで⁽⁷⁾」くると、銀行の企業に對する利害關係が「大きくかつ永續的とな⁽⁸⁾り、「企業にたいする銀行の勢力がま⁽⁹⁾」し、「銀行が優位にたつ⁽⁹⁾」という事情の分析を附加している。第六章の利

子率の分析に際しても、マルクスの利子率低下傾向に反對し、事實は利子率がほゞ一定なのに、利潤率は低下傾向を辿るから、企業者利得に比して總利潤に對する利子の分前が増大する。この事實は利子生み資本および銀行の勢力増大の一原因で、「資本を金融資本に轉化するための重要な一動力⁽¹⁰⁾」となる、とのべている。

第二篇では、第七章で創業利得の解明を中心とした株式會社の分析、第八章で資本の動員を可能にする機能を果す取引所の分析、第九章で商品取引所の分析が與えられ、第一〇章で、資本の動員の分析により新たに附加された株式發行の活動を媒介として、銀行資本が産業企業に介入する、という事情を分析している⁽¹¹⁾。

第三篇では、第一章で競争から獨占が成立する過程を分析し、第二章で獨占の形態それ自體、第三章で獨占が商業機能を減少させることを分析し、第四章で獨占と銀行との關係および「金融資本」を分析している。

つまり、第一篇で、資本主義的信用の最重要な一種類である資本信用を媒介として、銀行が産業と密接な關係を結ぶことが説かれ、第二篇で、株式會社・有價證券取引所による資本の動員によつて、發行業務を媒介として、この關係が一層緊密なものとなること、第三篇で、獨占の成立によりこれら兩者が一體となつて「金融資本」を形成すること、をのべている。銀行と産業との關係が、資本信用・株式發行・獨占によりいかに密接化していき、最後に「金融資本」において一體となるか、とい

う論理こそ、ヒルファードディングの「金融資本」の分析の中軸をなしている。

したがって、既述の「あみ入れ」方は、「資本論」における銀行信用に代るものとしてかれなりに考えだされた資本信用を媒介として、銀行と産業の關係が密接となることを、「資本論」の第五篇に相當する領域でのべ、この上に、マルクスが十分觀察できなかった新しい要因としての株式會社・獨占の分析を附加し、これらがそれぞれ兩者の關係をより密接にすることをのべる、といったものである。

もともと兩者の關係はどうかという點から、「金融資本」を分析しているのだから、この論理をそのまま踏襲するときには、必然的に兩者の關係をあらわす形態に力點が置かれ、本質の分析が容易に看過されることになる。従來の研究におけるこの概念の取り扱い¹³は、このことを端的に示している。

- (1) R. Hilferding, *ibid.*, S. 1, 邦譯一頁
- (2) R. Hilferding, *ibid.*, S. 1, 同所
- (3) R. Hilferding, *ibid.*, S. 1, 同所
- (4) R. Hilferding, *ibid.*, S. 1, 同所
- (5) R. Hilferding, *ibid.*, S. 2, 同所
- (6) R. Hilferding, *ibid.*, S. 116, 邦譯一三九頁
- (7) R. Hilferding, *ibid.*, S. 116, 同所
- (8) R. Hilferding, *ibid.*, S. 116, 邦譯一四〇頁
- (9) R. Hilferding, *ibid.*, S. 116, 同所
- (10) R. Hilferding, *ibid.*, S. 135, 邦譯一五八頁

(11) 「銀行の勢力が強ければ強いだけ、配當の利子化は、ますます完全におこなわれ、創業利得は、ますます銀行の手に歸する。……そこで、會社と銀行とのあいだに、創業利得の分配をめぐって、一種の闘争がはじまり、そこで、銀行への自分の支配を確保しようとする・あらたな動機がうまれる。」(R. Hilferding, *ibid.*, S. 177, 邦譯二〇四頁。

「わけても、創業事務は、株の賣却によって貨幣資本がふたたび銀行に還流するまで、長かれ短かれ、これを産業に固定することを意味する。そこで、自己資本の増大は、産業企業にたいするより永續的な参加と・けっきよくの支配との・可能性を意味し、また、商品投機と有價證券投機とにたいするより強力な干渉の可能性を意味する。」(R. Hilferding, *ibid.*, S. 250, 邦譯二八二頁)

(12) 「カルテル化により、銀行と産業との關係は、いっそう緊密化されると同時に、産業に投じられた資本の處理權は、ますます銀行の手に歸することになる。」(R. Hilferding, *ibid.*, S. 334, 邦譯三七二頁)

(13) 屢々いわれるように、ヒルファードディングは、當時のドイツの事情に強く影響されている。ヤイデルスによれば、ドイツの銀行の産業にたいする關係は、次の四つの形態をとる。(1)交互計算業務による關係、(2)發行、(3)銀行代表者の・産業會社の監査役會への・配置、(4)直接參與、このうち(1)はヒルファードディングの資本信用、(2)は株式發行、(4)は融合としての「金融資本」に相當し、そして(1)(2)

はそれぞれ(3)の契機となつていと解される。Otto Jeldels, Das Verhältnis der deutschen Grossbanken zur Industrie mit besonderer Berücksichtigung der Eisenindustrie, 1905, S. 109.

(14) ヒルファーディングの「金融資本」の概念が、銀行と産業との關係を中心に展開されたため、本質が不明確のままに残されているとすると、「金融資本」に關するレーニンの規定をわれわれはどう理解したら良いか。レーニンは、既述の如く、兩者の融合をもつて「金融資本」としては、が、その際必ずしも十分にその本質を考察したとは思われない。この點の考察は、レーニンの「帝國主義論」の再検討を企てた、別稿にゆずりたい。

三

「經濟學批判綱要」において、マルクスは「資本一般」(Kapital im Allgemeinen)を二様に理解すべきだとしている。すなわち、(一)富の凡ゆる他の形態から區別された、資本の特殊な違つたものを理解する抽象として。(二)特殊および個別の形態と並んで實存する現實的形態として。(一)は三つの意味を含む。(1)「資本一般」の考察に際しては、特殊な形態の資本、異なつた諸個別資本、を除外するということ、但し、この抽象内で存在する區別は抽象的特殊性として把握され、この特殊性は、各種資本がその特殊性の肯定か否定かによって、各種資本を特徴づけるものとしている(例えば、固定・流動資本)、(2)資本の發

生過程、生成しつつある資本、完成以前の資本を扱う。(3)資本それ自體の凡べてに共通な、あるいは、一定量の價值を凡べて資本たらしめる、諸規定を考察する。(二)は、全社會の資本として、資本家階級の一般的經濟的基礎として、實存すると理解している。「綱要」の主要な研究對象は、「資本一般」であり、したがつてこの「資本一般」と並存する特殊な資本はまだ十分な研究對象とならなかつた。「資本論」では、先の「資本一般」が擴大されて、産業資本の分析が與えられている。と同時に、商品取扱資本・貨幣取扱資本・利子生み資本等の特殊な資本もまた考察されている。マルクスは、「ここに産業(資本)」というのは、この資本は資本制的に經營される一切の生産部門を包括するといふ意味においてである。」とのべている。つまり、特殊な資本が分岐していかない、凡ゆる資本に共通な抽象的規定の總括として、産業資本が把えられている。

「資本論」において、この産業資本から特殊な資本が分岐してくる論理を、次に考察しよう。

資本は増殖しつつある價値の運動體である。その運動は、商品・貨幣の姿をとりながら行われるが、流通段階と生産段階とを經過する。資本價値は、流通段階内では、貨幣資本および商品資本の二形態をとり、生産段階では、生産資本の形態をとる。かかる三つの形態をとり、それらの形態に特有の機能を果しながら、循環しつつある資本價値が、産業資本である。

「資本論」の第一部第七篇では、資本の蓄積が反復して長期にわたつて行われる過程を分析しているが、その際、資本はそ

の流通過程をノーマルに通過するものと想定している。第二部第一篇では、この資本の蓄積過程の一切斷面をとり、資本が循環の反復に際して、とっては脱ぎ、脱いではとる基本的形態を研究している。産業資本が、商品・貨幣・生産の三つの資本の形態をとりつつ、循環をくり返していく過程で、資本が増大し、有機的構成が高度化し、價值構成の變動がおこる。ここでは、かかる價值革命は一應捨象して、循環の基本的形態を明らかにしている。

ところで、産業資本は、その循環過程で、商品資本の形態から貨幣資本の形態へ、貨幣資本の形態から商品資本の形態へと、轉形する過程をくり返す。この轉形は販賣と購買であるが、この賣買の機能が特殊な資本に独自の一機能として自立化すると、産業資本のうちから商業資本が分岐することになる。

この賣買の機能を商品の側面から骨化したものが、商品取扱資本であり、貨幣の側面から骨化したものが、貨幣取扱資本である。この商品取扱資本は、賣買の機能に伴う流通費を、産業資本のために、軽減し、より多くの價値を作らせることになる。

また、商業資本と産業資本との間の分業により、商業費の集中・減少が生ずる。

たゞマルクスは、第四篇では、産業資本から特殊な資本としての商品取扱資本が分岐してくる過程について、分業によるものとのべているに過ぎない。「綱要」では、生産からの商業の分離には、交換・交易が一定程度まで發展していることが必要である、とのべている。この分業は、産業資本の生産および流

通の擴大、生産の集中の増大を、論理的に前提していると解される。つまり、第二部では、長期にわたる資本の蓄積過程の一切斷面をとり、そこで産業資本の循環形態を考察している。その産業資本の一機能——この機能の行使に伴う費用は空費である——が、商品取扱資本の独自の機能として自立化するためには、總資本が空費による利潤率の低下を阻止することを要求することとともに、商取引に従事する資本を存立させ得るほどの賣買の擴大・蓄積過程の進行が必要である。

産業資本の循環過程において、貨幣の形態で存在している支拂・購買手段の豫備基金、遊休資本という貨幣蓄藏により必要となる、保管・簿記・授受・決済等の諸機能が、特殊な資本に独自の機能として自立化すると、産業資本のうちから貨幣取扱資本が分岐することになる。この貨幣取扱資本は、産業資本が自らこれらの機能に従事する場合に比して、豫備基金・遊休資本という形態での貨幣蓄藏を、縮少する役割を果す。

貨幣取扱資本の場合にも、産業資本からの自立化を、マルクスは單に分業によるものとしているに過ぎない。貨幣の取扱に伴う労働は、その労働のための諸設備と労働者の生活資料とを、その社會の年生産物から必要なものとして控除するから、その社會の空費を形成する。この空費は生産・流通の増大につれて増大するが、これは總資本の利潤からの一層大なる控除をあらわす。したがって、總資本はこの負擔の軽減を必要とすると同時に、蓄積の進行は、この機能を一資本家に任せざるほどにまで、貨幣蓄藏を増大させる。産業資本からの貨幣取扱資本

の分岐は、論理的にはこのような蓄積の進行を前提しているものと解される。

産業資本の循環過程における流通時間の存在は、産業資本に流通費という負擔をおわせることになる。この流通費による利潤率の低下は、商業資本家の肩がわりによって、軽減される。商品が販賣されなければ、資本は生産を繼續できないから、流通時間は資本にとって必要悪をなす。ところで資本制生産が發展し、固定資本が増大するにつれて、ますます資本は生産の連續性を要求する。したがって、流通時間中生産を繼續させるため、追加資本が必要となり、利潤率が低下する。これは社會の總資本に、平均利潤率の低下という形で、共通に負擔がかかることを意味する。この損失を回避するために、諸資本間で追加資本の相互的な免除の方式が形成される。これが商業信用である。銀行はこの商業信用による資本節約を一層促進する。先のべた貨幣取扱資本の諸機能に、貸借の機能と信用の取扱が結合することにより、銀行が成立する。銀行が、一方でその手に集め、他方で貸付けるものは、利子生み資本である。

産業資本の循環過程において、投下された貨幣は、一定額の剩餘價值を伴って、復歸する。この價值増殖の機能が、貨幣の屬性として自立化し、独自の種類の商品となったものこそ、利子生み資本である。利子生み資本の運動においては、支出された貨幣額が一定期間後に増加分を伴って復歸するのであるが、その際媒介的の中間運動は消失している。

個々の資本の再生産過程で遊休資本は必然的に生ずる。固定

資本の填補のための積立金、剩餘價值の資本化による蓄積資金、流通期間中生産を繼續させるに必要な追加貨幣資本、生産性の増大に基づく價格下落により遊離した貨幣資本、利潤率の低下によりはや独自の行動をとりえない過剰資本、等が銀行の手に入り、貸付けられることになる。この貸付けられる資本の貸借により得られる利子の差額が一資本の平均利潤に等しくなるほどに、遊休資本が増大することを、銀行は論理的には前提しているものと解される。先にのべた遊休資本は、生産・流通の擴大、蓄積の増大により、増大する。したがって、産業資本の再生産過程で生ずる遊休資本が、蓄積の進行につれて増大し、銀行の手に入り、利子生み資本に轉化する。産業資本からの利子生み資本の分岐は蓄積の増大を前提している。

以上のような素朴な考察から、産業資本から特殊な資本が分岐する論理は次の二つのものからなりたっていると結論できる。一つは、産業資本のいかなる機能が、特殊な一資本に独自の機能となり、その資本をしてまさに特殊な資本たらしめるのか、という点から把えた論理であり、今一つは、産業資本の再生産過程の中から特殊な資本が自立化してくる過程の論理いかん、という点から把えた論理である。この自立化の一つの根據として、商品取扱資本・貨幣取扱資本・利子生み資本のいずれの場合にも、流通費・遊休資本の形成が、生産過程の價值増殖の進行にとって必要悪である、という矛盾があげられる。先の分岐の論理は、これら兩者から成り立つものと解される。ここでは、便宜上、第一の点から把えた分岐の論理を內的論理と

し、第二の點のそれを外的論理と名づけることにする。

(1) Karl Marx, Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, Dietz Verlag Berlin, 1953, S. 333. und S. 217, S. 252, S. 735.

(2) Karl Marx, Das Kapital, Dietz Verlag Berlin, 1953,

Bd. II, S. 48. 長谷部譯第五分冊(日評版)一〇二頁

(3) Grundrisse, S. 564.

四

ヒルファードディングは、株式會社・獨占の成立の論理を次の如く展開している。資本制生産が發展するにつれて、資本の有機的構成が高度化し、固定資本が増大するため、資本の轉出が困難となり、同一資本同一利潤の原則が障害をうける。これを克服するものとして、利率の平等性に基いて個々の所有者に配當の平等をもたらす、資本の動員の機構・株式會社が形成される。ところが資本の動員は、利潤率均等化への資本の現實の運動にはふれないから、資本の調達により、發達した産業部面では資本の集中・有機的構成が増大し、利潤率が低下する。他方、個人企業が支配的な部面では、過剰資本が流入してきて、同様に利潤率が低下する。かくして、兩極で、平均以下への利潤率の低下の傾向が生じ、資本力の強いところでは、それを克服する反對傾向を喚起し、獨占が形成される。

ここで、固定資本の増大につれて、貸付資本が固定されるため、資本家は主として新資本のみしか獲得できないことにな

り、資本獲得上に困難が生ずる。しかし、資本の増大は競争上の不可避的な要請であるから、この矛盾を克服するものが必要となる。かくして株式會社が形成される。そしてこの株式會社の成立の根據は、有機的構成の高度化・固定資本の増大が端的に示すように、蓄積の進行・集中の増大である。

この矛盾を克服するという視點は他の箇所でもみいだされる。第七章で、固定資本が増大すると信用貸された資本が貸付資本という性格を奪われることになり、したがって、私的企業家への信用が、「自分の取引先の事業關係を熟知する地方小銀行經營つまり私的銀行家によってなされる」⁽¹⁾他方、「株式會社はたやすく信用をえることができる、なぜなら、その組織の特性が、銀行の信用する者をたゞ代表として入れるだけのことによって、監視を非常にたやすくするからである」⁽²⁾とのべている。また同じ章で「一方では、あらゆる貨幣がますます銀行に流入し、もっぱら銀行の媒介によってのみ貨幣資本に轉化できるようになる。他方では、銀行資本が産業資本に轉化することにより、資本は、貨幣形態で質存することをやめ、したがって、また、銀行資本として適當な構成部分たることをやめる。この矛盾を解決するものが、資本の動員……である」⁽³⁾とのべている。第一章と同じ論理が第八章でもみいだされる。株式會社形成の根據としての集中の増大という視點もまた文中にみいだされる。第七章で「一方では、株式會社の發展するにつれ、また他方では、財産集中のすゝむにつれ、自分の資本をさまざまの株式會社に投じる大資本家があります」⁽⁴⁾とのべ、また、「資本の集中運

動は、あらたな獨立の資本として機能する資本部分の遊離をたえずともなう」とのべている。獨占の形成については、前述の論理しか發見できないが、集中に基いて把握している。ヒルファードイングの「マルクスにおいてその最高の表現をみいだした古典派經濟學の理論體系のうち」に「株式會社・獨占を「あみ入れ」る手法は、矛盾と集中の兩者から成り、先にのべた外的論理に相當する。資本それ自體のすべてに共通な諸規定を有し、凡ゆる特殊な資本の基礎をなす、産業資本から、特殊な資本が分岐する論理は、たゞヒルファードイングの如く外的論理だけでなく、内的論理をも包含するものでなくてはならない。内的論理によりはじめて特殊な資本の本質が明らかにされる。

かれは、このように外的論理により抽出した株式會社・獨占が、産業と銀行との關係をますます密接にするとして、「金融資本」の形成を説くのである。「金融資本」の形成要因が外的論理に依據しているのみでなく、「金融資本」そのものの形成の内的論理が看過されている。⁽⁸⁾

「金融資本」が理論的に把握されうるものとするならば、産業資本から「金融資本」が分岐してくる論理を、外的論理と内的論理との統一として、明らかにしなければならぬ。もしこれが不可能であるならば、「金融資本」はその特殊性に基いて各國に支配的な型として把握されることになる。今後「金融資本」概念が検討される場合には、融合の形態ではなくして、その本質を内的論理に基いて探求することが、生産的であるように思われる。

- (1) R. Hilferding, *ibid.*, S. 170. 邦譯一九六頁
- (2) R. Hilferding, *ibid.*, S. 170. 同所
- (3) R. Hilferding, *ibid.*, S. 176. 邦譯二〇二頁
- (4) R. Hilferding, *ibid.*, SS. 193—4. 邦譯二二二—三頁
- (5) R. Hilferding, *ibid.*, S. 160. 邦譯一八五頁
- (6) R. Hilferding, *ibid.*, S. 174. 邦譯二〇〇頁
- (7) ヒルファードイングは、銀行信用により貸付けられる資本を外的論理にのみ基いて把握しているため、利子生み資本として明確に規定していない。
- (8) ヒルファードイングは、株式會社を、獨占形成の一段階において、把握している。歴史的事實として、イギリスでは一八六二年の會社法の制定以來、アメリカでは南北戰爭前には一般化した一般會社法の公布以來、ドイツでは一八七〇年の株式改正法の制定以來、株式會社はわけても急増している。この時期は産業資本主義の末期から獨占資本主義への移行の時期にあたるため、理論的なカテゴリーとして株式會社が位置づけられるのは、産業資本主義の一般理論においてであるか、獨占資本主義のそれにおいてであるか、という問題が生ずる。金融資本論の出發點如何という問題は、この點の解明なしには、答えられないように思われる。

— 一〇月一八日 — (一橋大學大學院元學生)